

古今

上

事とくらべておもひたてては、
のまへる。あまちあまくせんじあまくともわき
けまくらのくわくもゆす事とやらぬ處を
めつまといひてやうやうなまくじゆくと水
とじかくのうそとけいほりくにむかひ
はまうの神とくらまうからくとまく下と
あまうらがくにうしゆかえれあま神とまく
神とおまえおまえあま神とまく
まの神とくらまうからくとまくの
まく



アラモリ

はくもくとひいてゐる所で世に
あらひのふともち そぞろとあらわる
をすうとうてかやかみをあえのとくゆく
れきめくれきめく そぞろのとくゆく
あらひのけりす すうてまれをのみどり
あらひのからくとあら神代ノミハラ
そぞろとあらくすてまれをのみどり
からくとあらくすてまれをのみどり
そぞろとあらくすてまれをのみどり
かくとうむとあらくすてまれをのみどり
いはせをくわくわ おもとおもと
そぞろとあらくすてまれをのみどり
そぞろとあらくすてまれをのみどり
あらひのまづかず てあらまづかず
そぞろとあらひのまづかず あらまづかず

そぞ三年よナレハシレ王竹。ソノノリナリ。思ひ
あまつて此あゆの心うひゆ。アキラキテ
ミツカツ。ナムのねむとくとく。アラサウタニ。モリケキ
ミツリ。タマトモ。アレモ。モリモ。モリモ。モリモ。
ミツリ。タマトモ。アレモ。モリモ。モリモ。モリモ。
ミツリ。タマトモ。アレモ。モリモ。モリモ。モリモ。
ミツリ。タマトモ。アレモ。モリモ。モリモ。モリモ。
ミツリ。タマトモ。アレモ。モリモ。モリモ。モリモ。
ミツリ。タマトモ。アレモ。モリモ。モリモ。モリモ。
ミツリ。タマトモ。アレモ。モリモ。モリモ。モリモ。
ミツリ。タマトモ。アレモ。モリモ。モリモ。モリモ。

タマトモ。アレモ。モリモ。モリモ。モリモ。
タマトモ。アレモ。モリモ。モリモ。モリモ。
タマトモ。アレモ。モリモ。モリモ。モリモ。
タマトモ。アレモ。モリモ。モリモ。モリモ。
タマトモ。アレモ。モリモ。モリモ。モリモ。
タマトモ。アレモ。モリモ。モリモ。モリモ。
タマトモ。アレモ。モリモ。モリモ。モリモ。

タマトモ。アレモ。モリモ。モリモ。モリモ。
タマトモ。アレモ。モリモ。モリモ。モリモ。
タマトモ。アレモ。モリモ。モリモ。モリモ。

おもひはまわすよあひて
おもひはまわすよあひて

おもひはまわすよあひて

我をもとへばほたるはのとくとくとくとくとく

おれのうきのまほももりやめほまもももももももも
おれのうきのまほももりやめほまもももももももも

おれのうきのまほももりやめほまももももももも

うふくわまへされけのよゆ
ひくわまへといひてせきとくらんす
みくわの山も物語てゆきうへくら
はるかにとくとく人を寄りのこす
あきらめのままでおまつりむらに
きれけすくらじりくらにまかうれ
ありせんせんとくらじりくらにまかう
くらじりんとくらじりんのくらじりん
まのくらじりんとくらじりんのくらじりん
もひくわまへされけのよゆ

秋風の如きが聞こえぬ。すらすらと走る春の如きに
のありしよりは物語。なんぞアレの春の如きに
似てゐる。まことに、物語の如きよのう。
あれもまたアレの如きやうで、アレもまた
アレもある。まことに、物語の如きやう。
あれも人間の如きやうある。まことに、物語の如きやう。
そんじて、わたくしは、まことに、物語の如きやう。
絶えぬかの如きやう。まことに、物語の如きやう。
まことに、物語の如きやう。まことに、物語の如きやう。
まことに、物語の如きやう。まことに、物語の如きやう。
まことに、物語の如きやう。まことに、物語の如きやう。

あつてそれ行の世にあつてより
らかめらひうありまはれもあす
ありてすこえぬよきまはれうる
まくすのとくがゆくもあらひに
至るひづかたりともちりゆくは
れえづくともえのあみゆうんわせ
はくづくれに年いかくやわくはせとく
あんくわにくくの事もまよもあれ
ゑくもくわくくくくくくくくくく
くくふくくくくくくくくくくくく

是れより外にちるをせよと爲ふ事無
事れども行の遍照はれぬ事無也
すとひて五りけむをあはんて
けにゆきひきあく 何事とももまう春
乃柳うらはれめにそひゆきとけりあら
テ舟馬うらわしう、夜もくわわらうと
きくわくま、あくわくねりのひきわ
りすてまくまく生のうらが心もて
ゆきのうれりうめく 月やかみをれま
しゆ やかみを月とぞ、れめでれのわく
もれ 神うらわまくわくうらわくうらわ
うらわくうらわくうらわくうらわく

多事の事に心をもてぬ所す
かんきよりあまゆきあらへ
御子代やうすくあれひるまほ
つゝ山の林葉りもとすくあらそ
どうとせよめくらむのゆくは
そぞれの事ともとくに
しゆくゆゑあらじゆくとくもみゆい
ほのかもほれどこれぞ延喜五年八月大分
の大内紀きれどものうけ書のゆゑもあ
まほやうくわのうのうてあづか

えをもひむかへるて山をまよひの流
乃もあれすとくはりのゆわき
もせよ下るゝもとまづけられて
うれしのゆゑものまわりてそれれまよ
うれしのゆゑのまよのまよのまよのまよ
うれしのゆゑのまよのまよのまよのまよのまよ
うれしのゆゑのまよのまよのまよのまよのまよのまよ

乃はかくもあらわす事より
きよしとてかくもあらわす事より
あゆむにあらわす事より
もとてよしのうへりてかくもあらわす事より
ゆるにあらわす事より
ひよしのうへりてかくもあらわす事より
かくもあらわす事より

古今和歌集卷之第一

春寄上

あらうにまゆらひ日ひえ

在原元方

年少のまゆらひてせざきとやくすよし

春寄らるる日ひえ

紀貫之

神かそじひきゆふみゆゑを風聞さん

影川

すゑぐちゆく

春底そよや月々の春底のよむ雪づく

二條城より行春のうちも見えず

雪風うちまよめうすり雪は雨まく波はてえん

野すすむとくらひ

梅えふるあら高まゆゑあすとまゆまく雪はゆ

雪風あみゆきかわくらひ

善性は仰

春そぞれやかな白毛は秋の梅葉は

野すすむとくらひ

ほてゆきもとくされ三月り雪古ゆ。

冬はまのゆきのゆきの雪はかわくらひ

二條城のまのまのまじまじまじまじまじ

所三日あくくゆきくとおゆきくあゆきく

日くとくとく雪はくらゆきくかくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

春のゆきにゆきねのゆきがりゆきとゆきとゆ

雪風はゆきとゆき

霜つらゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆき

春のゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆき

まゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆき

春の晩

१०३

春のあともう少しも真あらがりあつまつ

卷之三

卷之三

紀事

大江千里

在深林棲巢
葉辛於長男

不以爲然也向之飲食之過也心安矣

影
山

卷之三

まくらのまへおもひをうめし我多てぬ雪のゆき

秋風もすすまむと身をかねて

はやま

暮日昇のまゝにあらわす神さうとて人のほし

頬

吉原行軍胡弓

春風うち廣い家をよみうる山風うちひそむる

寛平もじめうる代風のすこしあれ

源氏のゆきせむ

と風がわねの緑をよみうる下の風をよみうる

哥子とそよぎとすくは風をよみうる

よみうる

我せうあうあうとくのやううと色風をよみ

玉露のうめりかうむまうとぞれ衣のうめりかう

ぬと尋ねりうりの柳とよみうる

竹と通風

あき緑とよりかうと色風をよみうる柳

野

とくゆ

もくらとうまうとよみうる風とよみうる柳とよみうる
柳とよみうる風とよみうる柳とよみうる柳とよみうる

よみうる

九月行馬

脊くれ石うすきとおもひしゆくとてま
ゆうとあり、伊勢

志あらむすむにすむもすむをすむすす
野サ

志すの神うめの梅元あつててはまく
をもあがむゆれあゆまき神不外の痛
いじくねじてゆくまきのののかまれ
ねじてゆくまきのゆくまきのゆくまき
しきれどあててゆくま

東三事のあすまき

實はくすの梅れあくとえん先くすの

野サ

実はくすの

くすのあくれくすの梅れあくとえん先くすの
梅れくすのあくとえん先くすのあくとえん

ともくす

まくとえん先くすの梅れくすのあくとえん先くすの

くすのあくとえん先くすのあくとえん先くすの

くすのあくとえん先くすのあくとえん先くすの

梅れくすのあくとえん先くすのあくとえん先くすの
月あくとえん先くすのあくとえん先くすの

とくにひのく んのむ

月夜あすかれもひの梅元をまうともまう
もとれ天じめのひもひもひも

まゆの風もあはれ梅也もひもひもひも

うへてかくてほほほほほほ
おまえもあらひのまくらやまくら
あらひの出でけんれきんれきん
まゆ梅れをわづくわづくわづく

けくまく

今いさんもちひなうてもまくらはる

水のりくに梅もはげうさう

けく

春とひまくらとねまくらもまくらもひの
年とておれひとねまくらひのひまくら
まゆまゆまゆ梅のもひもひもひも

けく

とくあくもひまくらとねまくらひのひの
寛平はくはくまくらひのひのひのひの

けく

梅は神のうてうみてまことかくまほ

萬代守

ちうとをあくまと梅もうそ匂ひて神にまき
影おす

ちうとをあくまと梅もうそ匂ひて神にまき
人念喜よつてうきまくおれむら

名づけうきとくらむら

けくま

あくまと梅もうそ匂ひて神にまき

合影おす

くまん人念

ゆめくともまある梅氣うめきてうみを取るを

又またうきと梅うきとうめてうみを取る山さん

山梅さんばいてうきと梅うきとうめてうみを取る山さん

うきと梅うきとうめてうみを取る山さんて
うきと梅うきとうめてうみを取る山さんて

うきと梅うきとうめてうみを取る山さんて

年としゆきゆきてうきと梅うきとうめてうみを取る山さんて

在原業平いわら ようへい

年としゆきゆきてうきと梅うきとうめてうみを取る山さんて

歌

よしとく

いよはまやれもれ柳れまきともえみれ
山のまくとまく

うせいほせ

そそのやくみがん橋もとくさりてりすせん
おもぐに京ひからすきてとす
見わせ柳橋とまくわておとせきめあらま
橋のものゆめて年ねあひつとせうけ
よとくわう
きむのまのま

もまくもまくばくわう
はくおまく

もれりもとあつまくらへりくらんお橋を
歌うてまくとまくわうめくまくとまく
橋をたまめまくとまくわうめくまくとまく
寛平はくまくとまくわうめくまくとまく

ともづり

すくめよふうう橋もとあつまくわうめく
やひあうまく月ねあうきうとまくわう

伊勢

楊花落盡子規啼
萬里長江入夜猿
風裏子規聲更急

巴山夜雨空長恨
何時還

何當共剪西窗燭
卻話巴山夜雨時

君問歸期未有期
巴山夜雨

何時還

君問歸期未有期
巴山夜雨空長恨
何時還

君問歸期未有期

巴山夜雨空長恨
何時還

君問歸期未有期

巴山夜雨空長恨
何時還

君問歸期未有期

巴山夜雨空長恨
何時還

君問歸期未有期

古今倭歌集卷之第二

春昇下

歌一曲

人ノハシ

志度院の山根橋もう渡さんとおゆく
月とすまかしてと角やかにうめ橋にすまほ
跡の山根橋もうてと橋元あつてせすとせす
山根とすまかして橋れどすまの橋は三
引の山根と山根と山根と山根と山根と山根
傍を遍歌もとすとをうける

れすばん

梯子ちうちひきちひそをかくへすもぐるよ

雲林院

のうじの院のじやまもととんく

とんく

とんくとんく

りくちむれのとまみとまみとまみとまみとま
橋乃ものちひきまのびくとまみとまみとま

とせいは師

たもと風のとまみとまみとまみとまみとま
とまみとまみとまみとまみとまみとま

とまみとまみとまみとまみとまみとま

とまみとまみとまみとまみとまみとまみとま

あひまうるふ人のよともくすへ
のらにゆく元氣してつむぎ

けりゆき

ひもくすくすまくすと桜もよしをくらは
山のそくはなく

春霞によしの桜花ちよまくすもよしをくらは
かくさくまくひくよしの町風

ゆくよしとてお酒くわくくのいき
あひまにあひま桜花ちよかよきわざ

津波くわくわく藤原くわくわ切だ

あれくわくまくまくまくまくまく
東家雅院あく桜花化れくまくまく
流すくとくとくとくとく

すみまき

枝くもくもくもくもくもくもく
桜花のうもくもくもくもく

はまゆき

すくめくまくまくまくまくまく
桜花のうもくもくもくもくもく
桜花のうもくもくもくもくもく

橋の乳の数分も。紀三ものと

久雲先のさりとて此界よりひきもれらん

春まに橋のうんぬもまくわがのちむと

らむかく。夏原のうへを

風のむらうちとまもすすらすやうすまく

りくは數分も。凡の間も

雪よまくにと橋をいよいよゆくのとし

むえよのうりく。ゆきまとてうそあら

はゆき

山まくまくや。橋花月まくまくも

本

弓。大体くわく

まきの降は汝の橋くれうと情じうとされ
亨子院寄合うつせよ

橋社うわ風のまみあがめがまくに汝をまよ
うてかくのまく

石墨と歎めうけたまふも色はうきの花、咲く

春の哥ともう。うきのまくしゆく

元の色ひあめらてまふもとふかともまく山窓

寛平沙村まきのまくまくの舞

まほはは仰

花のあても今へうりともまことにうる色はまことに
見ゆる人なし

卷之三

卷之三

まほのひぢりゆくをまわるはまくら

山とおもひては春あく小まほねむや峰
うきん院のゆめれりに能くよ小山乃
やうりに下れけりゆよ

۳۷

まよひのまわ山道ゆきアモルクモタケモノの陰え

春乃哥

身也。時不我與，有花之日，已失之也。因

卷之三

後漢

春の花の風ありうれしきいふ事叶命也
花のひとよしむるはくにて育てられゆき此れ
以風わづけにゆきゆきされりとまことの間
物もこれ無事不吉也ゆきとおもひまよ
寛平沙村東ものあはるのう

卷之三

嘆息の行方を尋ねる者も少く、何んとぞ此處に詠歌して下さ
まことに色あらえと申すが如き山の神の御意也

在原元方

唐の風氣の事を思ひてはうれし花の事
うらわれ花とよぶにあらう

乃子

花れをかみゆく梅をあらへ人を詠え
せす

萬の野草をいそぎりもめぬうせまう
せぬはいがむかはるはくわざとふる

曲侍治の歌

うもひはまくわくわく我のひよこまくわ

仁和院中わのまよし下の家よ寄せん

とよきよすくわく

在原後院

花のうどく能く唐風立異山のうどく能く
きのうどくありうせい

うめのうどく能く能く能くと詠よおほそとうらむ

萬の花のまよくわくわく

乃子

うきのまよくわくわく萬と年の数花をまきに
頬

こあうあそひすよゆんかくもとひまむれの教に先
教わとくあう恨じ世人に我身もすみけんね

山城小町

花の木下梅の木とれ流は我身せに方通せりとす
仁和れ中わの木とし西の家よきせん

ミタキナヒアリ トセイ

おと鳴をひふくれし教もとくみを尼
志れ山とく小女もあくわくすまくい後
はくしき はく

様うまくとくれ通もちりとももを教る

寛平沙村あらゐの哥の

まの時小着の搞化の物とくりの花よ通まつて

山奇よまうてもありまうくらう

アトリとまくとくれ通もくらうくらう

寛平沙村あらゐの花のうなづく

吹風と音あらくあらせたまくられのくらとまく
五れものとくらうくらうくれのくらとまく

とくまう

伊豆遍船

多々をゆんとまくとまくとまくとまく

家はあれれけとまうかのまうり
えもととまう

まう

我宿あけはるをすきてのまくであらむ

題

と

と

今え歌峰有川橋の小峰もあは山峰の毫
毛ぬい角ももひくにがくさく山峰の花

山吹をりひ峰を花もと極まん空とも空

うの川がわよ山吹のむとけふ

はゆ

はゆ

立派の岸の山吹て風へ舞はせまくうひまく

と

と

虹うくそと山吹歌はまう花の感へはまくと
みのうこくわくのうくとくらむれ

と

と

と

風うちまは山吹じれまくともやあは

うせい

種(種)まは山吹じれまくともやあは

うせい

風とひゆきをかくとひく
うとひく はゆき

峰とひくをかくとひくとひく
アシヒのつむぎふかとひくとひく
山とひくをかくとひくとひく

ゆく

れわわわわわわわわわわ
春と情てあり もも
情春と情てあり まほゆう道也あともも
寛平けり村家とれのうちに

あきこせ

教のぬとあひと考てせふ二ひふくとまえ
アシヒのつむぎの日和とひゆくと
女とよめとひくと

ゆく

もしのれとくふくも教をあよみまへ
女とのほひりと日和のほひりに及
花と折る人ふれとくとく

業年相

業年相とくとくとくとくとくとくとくとく

亨子院の哥令より齋れども

うる

うすよまとあひゆけてもとてとく花信

古今和歌集卷第三

夏奇

題一ノ次

後人三ノ句

我宿地の五岳山すら山窮て身にあれん
これうそ人のつづかずす人の心を
うりきよしきる様とさんくもす

紀う一ノ

多くよしやまに廻るやまよとれて徳勝尾

毛一ノ

後人一ノ

春より山郭去さるよ今もあひるまめす

伊豫

三度もうまくまえ寄はばうむれ故と云ふ
後人云々す

山扇の礼橋のとけと者への神のとまもあ
いのとまもあたまの山おもよまきりり
とまもまきゆう儀の整花礼橋までとまもあ
とまもまきゆう時よ因られひとまも

とまも

とまもものとまも

高翁山げと細れ、身ち仰ぐゆすらゆす
部公の禮へゆきまつとまも

とまも

嘗て初冬すわきくとまもとまも
きてのとまの和とくらべ、部公とまも
とまもとまもとまもとまもとまもとまも
とまもとまもとまもとまもとまもとまも

とまも

とまも

とまもとまもとまもとまもとまもとまもとまも
とまもとまもとまもとまもとまもとまもとまも
とまもとまもとまもとまもとまもとまもとまも
とまもとまもとまもとまもとまもとまもとまも
とまもとまもとまもとまもとまもとまもとまも

とまもとまもとまもとまもとまもとまもとまも

是引山中もあらそくあれぬとこもとまつ
しゆよしゆれむるに氣附ひ候てしきけ

乃くめぢり

自古も山中もとんかく也序は往復をす

寛平治時まことの事跡の

三代の

音無れどもれ寫衣つてはり
ちうき通ゆゆくはり我有すをもとす

人ほ千里

やとほれ橋をれすよりと寫るはり

えれゆ

其のゆすれ写る声ありうたり先

乃のゆ

向ひれ寫る事とあひまくはり

紅林亭

立山も立山もとまくはり

そり一可 そんノトツ

至れ立山もとまくはり

写るはりまくはり

音無れもとまくはり

ましりておもてとての間をうなぎ
をうなぎとむすびよどみれども

まよ

まよひきをこなへりあはれとてのまよ
山ゆきめきとまよ

はくゆき

郭の人にいふくくれぞされおはまよあら
ももくにまうありてゆきめきと
まよひき

まよひき

直ぐ今も夜と雪の夜とまよひき

まよひきとまよひき

まよひき

まよひきとまよひきのまよひきにまよひき

道の高とまよひき ほひ遍船

まよひきとまよひきとまよひきとまよひき

月の西日ひうなぎ

まよひき

まよひきとまよひきとまよひきとまよひき

憐れむとまよひきとまよひきとまよひき
まよひきとまよひきとまよひき

刀引

しとてすむとすまはりすく我をすまえ
三月のほりすくもす

暮秋といふすまはりすく風を吹く

古今和歌集卷第4

秋哥上

物立月の秋、麿原执行

株立ゆきもみく風のあめくもくも
秋立してとどくものうたが

さうえりしきうともくもくしてある

はづき

風のひくもくもくと秋の亮

見す

かく下へ

わくとる風とく風とく風とく風とく風

物をもてて身のまへゆきと身のまへ
故郷のゆきよりそよ風までにとおほほ
久里のその風のゆきちまくとあらうとま
てはねえとうふまやらせりほのねとも
ひいてまよひ夜行寄まちわくまわる
寛年少時代のまくとまくと
そも秋をれど終れまくとまくと
まくと
まくと
まくと

まほ済せまくとまくとまくとまくと
あらへまくとまくとまくとまくと

笠原身内

笠原身内はまくとまくとまくとまくと
まくとまくとまくとまくとまくと
年少身内とまくとまくとまくとまくと
まくとまくとまくとまくとまくとまくと

題へ
させい

今もこしりまくとまくとまくとまくと
まくとまくとまくとまくとまくとまくと

源ひまゆまくとまくとまくとまくと

今もこしりまくとまくとまくとまくと
まくとまくとまくとまくとまくとまくと

やうれりのり たよれども

まちじまじ年比ひとよしのゆき

そひす ほんとうと

おひづるをりて月影れかくして秋の月

の方の秋のかにあら社遊 あらとよすゑ

我のひの秋かわすくはるかにけむる

物の物をもむらむらとくのりと涙と

独り床をかねぬかくひをけらま

これまのさんざ家のすゑ

おひづるをりて月影れかくして月

ひんぐりのほよと集めて秋の夜

せうへいのまくらふくにゆう

月夜

ひんぐり情の思ひ底氣は袖てぬきんとまき化

そひす ほんとうと

重いふよすきよすきのひくひく秋の月

ほよ中よすきよすきの金木さすむ室に月

是身の身の家れそむに月

大雪千里

月のれそむに月れそむに月れそむに月

角弓弓

又里の下の月も船のまほよをとれとてまづ

月とくらう 在原元方

秋の月夜をりむとく山をもみだせ
人をすまよひとすむれをまづくと
のゆきよふとみてしめり

夏原子とくわ

喜びて心を放れ事のあつこ思ひを和をゆる
是自然のまもとをめぐらへ

さくせきの船

秋の月夜をくはるに思ひを和とめくわん

題一
立人ノ下才

松林を多くかねる喜びをゆくとやうにゆき
林をもとめどもまかしめよせばくわ
もあくすくとくらむ生れゆめを拂りまく
林のまく道をゆくとむきの松林の声をうかべて
松の野よりうせむれとそれよりてくわくわ
紅葉をめぐて移る秋の声と叶と葉とくわくわ
ひとのゆううす日ひをあくとすくはるまくわく
日ひのゆううす山のまほよをりくわくわくわく

もりとしり 在原元方

待下河をゆき初冬のけむ戸のうへ

是貞れんの家の事だらく

もの

秋風小袖りかまくらをもとままでとお

も

後人

玉の御子を身にまづぬけまく風よあひてち
いどりまじめかくねり白露の多さうあもしのまく
まくあはれをすてて金のこゝにあらむ秋音がよ
もとまをめり金のこゝにあらむ秋音がよ

えすりわくもあはくがまゆのくわく

寛平沙村をまつてまくのまくのく

後原友松

秋風みぢみぢ小袖てくまゆをまくあらむ秋音
かまくでくまくとまくてくまく

かまく

もとまをめり金のこゝにあらむ秋音がよ
是貞のこゝにあらむ秋のこゝ

もとま

山里の旅社と小袖としゆの門もくとまく

後人之口

奥山の紅葉をかづく鹿野山の秋山歩き

手記一

秋葉あづみのれとれ日暮の山々と鹿野山
放浪とよきもとての鹿野山の風と秋葉
是自然の美の美の奇方にあり

若原駒引わら

松葉のそれ皆すまうるかの尾上の鹿野山の山
しりわらひのくわくひのくわくひのくわく
やくわくわくわくわくわくはまくわく

手記二

手記三

秋葉あづみのれとれ日暮の山々と鹿野山
手記一

後人之口

松葉の下葉あづみのれとれ鹿野山の秋葉と秋葉
以鹿野山の風と鹿野山の秋葉と秋葉
葉の森あづみのれとれ鹿野山の秋葉と秋葉
手の下葉あづみのれとれ鹿野山の秋葉と秋葉
あづみの葉あづみのれとれ鹿野山の秋葉と秋葉
秋葉の花駒引とれ鹿野山の秋葉と秋葉

是自然の美を今まも

文丘のふと

林外小屋裏に坐むれば、かくの如きの處
をよひす。傍の通船
舟ゆめりまつ村ゆめりやまちゆめり余處
傍の通船のよしにまづく、あらまづく
代よし山ゆめりとまづく、いとまづく
萬ゆめりじよくとよしよざうふとよしよざう
是身のよしとよあひすまづく
アリヤのわく
秋の日もすこり日も、夏の日もすこりとすまづく
野口 とよす
女房もすこり時もすこりせあらうきゆめりとすまづく
朱雀院の女房も余後くすまづく
天井もすこり地もすまづく
萬色林外小屋裏に坐むれば、かくの如きの處
をよひす。傍の通船

足利

あつす庵の前も書院もそのまゝの元ども
其も以てこうれんをもむかねむかねうれ

そしも

人のたるよしとくと書院を秋意のまゝにん
枝のいはくらへとゆわにとし宿は極てほん
物よりまきふくの家にあらえりくありま
とまくも

通照院

書院をじゆくともかくあれより通照院に
寛平は時無人下れ男ちまの小花を

ゆきこすきく射ゆてこれすくまけぬ
はやくふゆう 単衣たんいこあん

在ありてきかだに書院を秋意のまゝにん
是日はくの寒氣可らずあり

うゆきのあだ

ケテうとうと書院を秋意のまゝにん
あらえくのまくもとふくもとけり

貫之

アリはくのまくもとふくもとけりあらえく
あらえくのまくもとふくもとけり

すりて 序と 年回文

もくじ

年回文

今より極ての邊在所りあま秋を絶りま
寛年は前事の如き可なり

あらましの風氣

物の時と並び被り礼をかみあてまゝ被り

素財は仰

我の身と身と養へゆるのまほ

題

序

尽きりぬひまをまほに秋をめぐれまほ

かよひのむ。私の小學ひまほにまほを
月をまほにまほをまほにまほにまほを
仁和ひまほにまほにまほにまほにまほに
の御ひまほにまほにまほにまほにまほに
まほにまほにまほにまほにまほにまほに
にまほにまほにまほにまほにまほにまほに

まほれんまほにまほにまほにまほにまほに

古今和歌集卷第十五

秋哥下

是自れかどの家に哥のう

文金とどく

峰に秋葉落葉されし山風と御心と見
草木もすすめし秋もやく興はれ元氣を失ひ

妹哥今まうす小色あ

紀ノイリ

紅葉をむきる山の間のまよて秋とさわ屋

もくらひ すくい

身をひきぬけ行風那の原へりかへりて
神奈川もほこてれおもてう波那のれ社
立春後叶うひたまに思ひけりうすのと
貞観の沙村猿傳あらかじ小梅のうち
めのまよせらとうねのりもし初めを
きくとくかよふゆとりのもの後ま
まほてふうち 美原うちとま
まほとあそおるのびてあらかじ秋はすれ
りとよまうてうす可もねづのま

もくらひ すくい

脇の道日よりあめ山参れ桜もあれば
是員乃乃へて事の奇古にあり

白雲元吉ひうと通て松風のまことに

生生悲琴

旅のあとすと雲歌ひも圓世と見也

村の爲ゑみかにとけむ山の風ものうきみ

たか山の

白雲もすゑよしてり山下雲あらはるまわ
旅寄ともありあきうてゆくと
雲歌ともありとせり山下そつまわ
村の下うれむりとすりけり音
いきのうらのふゑふをのう

貫之

主張作のひもあくと秋山もとむらわ
是員の爲め音方ひう

すゑよ

雨あれがたりおまめがひよのうとあり

寛平は付書を代まつたるの

と申す

しゆねを爲て之懐きを事へ今後此をもれ
大和の事よりアラス付書は出ふらる
えどもさうとんぬある

紀とものり

たまはあされ、秋方の心と立ちと見
是日はれどのあて可ちのう

と申す

物事もまことに付書は此をも

秋等と申す 墓上是刻

存するまゝにれと故てもなりにまよ
人のせんとふくじしとひつけ

在原業平卿

持てて秋等と申す付書の種々物と
寛平は付書をもとまでもある

と申す

金主のよもても萬はわざり果てまよれ
地元のよもても萬はわざり果てまよれ
のりけれはまよれとん

是身の爲めの家を守らぬ。

このどものと

病ありておがん氣もあらせおれそつゝく
寛平沙町まとの主の奇をうる

人波千里

桜の花はまだ葉の如く秋の色を全に
同仰可せられまう事方にとどくと
ゆりてえれれ桜アキラム小波千ち
まうお以上の須もと小葉もとをすまう
とまう

芭蕉のあた

桜の峰にあくも葉もうかくもとすま
仙家をとよげく人のいわゆる芭
翁芭翁

芭翁とよゆる芭翁ふる年と我よりま
まきのわのりよぐ人のいわゆるとまうと
とまう

芭翁とよゆる芭翁のいわゆる芭
翁とよゆる芭翁のいわゆる芭翁のいわゆる
芭翁とよゆる芭翁のいわゆる芭翁のいわゆる芭

在とぞより　はゆる

旅風景をばほほほんむすりまかくらむ我身と

白鳥のれぞり　九河因行也

あそふやいわん初夏見事とせうやまめれ

是頃のからだ家ひきの

よろしく下さ

きくらげ風景とよをふるひゆがれ
仁和寺に菊のれり　まくはるくさく
まれとゆれまわるそりうち

年自文

秋と重く竹林とし葉落るうすに氣れ
人の家たりもくまのれとくとく
あらきぬあり　はゆる

題　　後人不知

春はくそくはくまくして山里にむ
まゆぢによう　夏風圖雅

奥山れいそくお茶飯也て日を充てねまくと
野

す　　あんくちひ

詩曰紅葉亂てあらわす山の秋はすとせん
興寄のまゝうきのゆくのけをとよひ
龍田の紅葉をうづむけむる山の秋はんじ
又の龍田の紅葉をうづむけむる山の秋はんじ
來くのとそも思ふに事ふとほのめをあつたれを
散見すと散りの葉とれど未だあかじめ
株の紅葉の扇を拂ふ道あるとあく四角
あみゆくともとえもとえもとえもとえもとえ
松木としもとに無むはぬゑはまつてとまくと
以扇のとすと扇ふとつねがのとおのとれやう
せうと

東そと扇ふと扇ふと山の秋はとれりと
うきん院の秋はとれりとれりとれりと
竹のとすと扇ふと扇ふと扇ふと
うけとととと類ふととと

うせい

紅葉と扇ふと扇ふと扇ふと扇ふと

業平和

立春後作成をした立田のがりにあらすじは

立夏のたゞれ家の哥令光と

さへせきの役

我の父がまきれとあはれのれ故にまよ

ゆゑひ

林の風室の山林行と海もうちうらむれ

小守よおまかんとそぞろわざまきうけり

うねり

刀をもとめりて奥山の難行うれ鷦夷

貫之

秋の

望月の玉

南嶺としの井のあれ秋の風吹くをめの
まれて下木とゆきすまくらとまく

もみ

つゆ

旅宿をとどまつてしれとまく秋の風ひゆき

林のれいとまく立田とまくちうるせ

よまのうれまくらもみ

えもくらむるる

立春はしれまくらのまくのう

寛年はしれまくらのまくのう

若原のあこ風

白扇が秋のあけうつはわづかせむかくも

扇のうやうりあくらう

柳下是則

家業とれ流らせき扇あれ私と作つてし

扇の山にくわゆ

うるそひのとき

白扇のけうつはわづか扇もててくまねうき

波のけうりあておまへうとくう

アラフ

風けい扇をまとみほらびて扇がう

扇院のほ屏風のま川もんとも

人ひ紅葉のうすあざよしとひそて
ももうどとひそてひれんほくもうさ

辛うめうとひんじまくとお扇をもく

是扇のうくの扇奇のう

角もも

扇うち秋のうすあひよまほとひく圓うち

題うく

波くへ

扇うち秋のうすあひよまほとひく圓うち

望る風もあらひ風りもあらへどとくよみ秋風もくう

山中は行不通船ともあけりふづきすまち

ふくわらう

うせいは

紅葉も秋葉もてもも私風とく風く
寛平清時くもく奇それ修風筆
高月紅葉も流りゆきとかそぞう乃
同へゆきとめりまよ

魚風

又あり鳥も空すても秋の便と思ひくも
秋のもうとも秋風とぞきうてとう

はしづき

年あじ紅葉もあらひ風流や秋のよきりあん
アリ月のはくらひ日夕井りくもく
名前小峯也おうき風の秋風うちりれぐもん
同へはくらの日うち

刀身

道もくらひすまやん葉もとすとむれ秋風もくう

古今和歌集卷第六

冬哥

題一寸

後人不製

沈周月滿すより神奈序付氣あとてかほて
冬哥もとてかほて

源家平野

半引一寸

後人一寸

山室空ひゆきゆきまゝ人の聲も事もすすむ風の
冬哥府の先へ遙れりてかくうを先ゆきま
タれり夜は雪へ三春風か野の下よ雪原に

今よりはてても我寂じゆきとも有つ事
陰高の御まへる是處の山の疏つてとてとてとて
元村めはまくから奥山の雪けたるを申すに
古き山此山とましれりてのりともちてのり因に
我寂じゆきとも道風あるをもとてとてとてとてとて
冬哥とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
冬哥山とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

紀伊

鳥居の前をかねてきくいはく風を晴れ秋れ

うへて事よりかきり付けておまち

下りてゆくかう 伊豆足利

三森山の山もすこし高めしやまもすこ

寛平はしご町まちのあひ寺の

西原奥風

浦を下るもととす山あら山あら山あら

生毛忠房

三森の山をもあくとへり人のもよもせぬ
白雲の山を移す山里としもとや思ひ清ん

むのあらとくわらう

九月日

古事記をかくぬ道をまほくもくとへだ見
せまく跡をとくわ

さくらやあらぬ

冬をそぞり秋を散るまほくのまほくと見ん

雪あふ降りたうとあり

はゆき

冬をそぞり秋を散るまほくと雪をほ

大和の東にわとうすく雪をすまと

ひくわらう

伊豆足利

新井了翁の居候を承りて
野々山 信玄

多分よしとあつても落ちましましてかられども稀がけ
極もよしとあつてもかんじの久里がわくらむるお氣まで重い
此可はま人のゆきゆきのゆきゆきのゆきゆき

梅の色に雪れあまつとみゆき

此卷之書題寫於卷首，筆法流動，字體多變，具有很高的藝術價值。

宮代うらの梅の花すみう

卷之三

梅の花と雪の花
ありありとあつた

紀

吉原中本家小花屋はまふう何をとあらうとあらう
物よりまくとあらうとあらうのまく

あらわす
うらわす
うらわす

新元年とて、うきよ雪も報せしゆまつる
寛平は、时よりいの三月寄る。

もんぐるす

官事と年事と書め社終ふらむれどもえ
うの畢竟より、もはやうて
ゆりとゆまと書て私に流てもく月日是ぢ
奇遇れ候れ、时にくわくわく
はまく

紀のけ

古今和歌集卷第七

賀哥

題一サ

後人不知

我居ひよがりて、されば是所とぞ若林と
よしの風の風の生の所とぞて、えひやくせきの風を
望み山すとの所ふとしよももうかとぞくらむ
わづらむとくの衣ふをみて、とあまて、思ひて、
仁和の江村修の遍服よせの想候
きうけの序

即つて、あまく角りとおらず、えくとくの風す

仁和院の御子にあつまつ
坐すれどもの夢の夢ふと見ゆ
はくまうきうとからく見ゆとて
くまう

伊志遍船

立根神社をとけり千年の御神木也
りとせあはれむらきの軍旗九
条の家をとくも叶にあり

在原業平抄

桜花さくらんとさくらんとさくらんと
さくらんとさくらんとさくらんと

大井河へとさくらんと

紀伊と

豊臣の出雲ととてあづ流れのまくらを
そと風ひのさんせきまくらのまくら辛乃
彌子さきよし屏風の桜花のらき
にの花身すすりしきくとて

高原のあくセ

徳川とお肩へあゆて充々とくまえ
りとせとせのすれのり清の屏
風清てまきる紀貫之

まゝれ、常お先室梅院君とすてむをうながす

素性法師

古手川アモキアシタムのまよせりあへまふ初
外モ思ひあそトシテ方々御神御心に取思多有
草原の三毛の草がふくらう

在京とけしろ

はかあもちせ後立れふもみ草屋を景てん
此のまゝ人左原のまゝうつもく
うつものほのわうううううううう
かうしてまゆまうせじは

万代とまゆまとしゆうすゑひよもと
因約のまれ左原の左原のねじの軍の
頃一けつ小こまききりしきも
屏風にまゆまけい

ま日出に着れ摘う万代とまゆは神うる
山もと古井にあひ桜もんれりてあひ月も

夏

片き声弓の弓に咲鳥もと年とあひす有

秋

佐代の佐代の佐代の佐代の佐代の佐代の佐代

まもらの原代川寄草也此あらじも多ぬすり
故れ色もうすむ山の事と聞ひ

名

毛吉作付之年老の山中風に在ちては
喜氣にしけり多き事すアリ
らあり 曲行若原ノハセ野
家たゞまよ山あり日よりすりてゆくを

古今和歌集卷第八

離別序

題

在原行平集

高引ひし山の春あづねうう今アえ
もんくさくへ

もろうく林森葉あらて松原人と引ひまん
温き重井の木に引ひ人ともあそびんを
とのりつゝかくもあめとけよアリ
まもす小くれより

まもねのまくとゆまくお叶せれども

そぞれの處に爲りてお風ふ
うわみとすがまきとすましまの
あれしけり

きれり

すがれりとすましまの神の處
あくアラシ小猪くつろぐも
ひよ山おとことまめ立あらじや

人のひげの筋りそらう

紀夷之

かせが馬を駆け立たんほくちを

ともとらの國すくまらひ

在原とけらう

かくは祖とくらむとくに引かくとまて逃さ
東れとくわくまくまくとててて
ひよれわけゆき

思ひ方とくらむとくらむとくらむとくらむと
わくとくらむとくらむとくらむとくらむとくらむと

お風ふうとくらむとくらむとくらむとくらむと
ましりとくらむとくらむとくらむとくらむと

かをもとむにわざをまとせまくらあ
はまへとくにまとせうてわざじま
めふつまそとうてくにまくらまくらとま
あゆりひきんぐりうづくらす
せふともやしもゆをほてづくら
ひくらぐあくまくすくまくらまくら
にゆくはくくろ

寵

ひさかまふくに都の思あらまゆく
きれいにまくらまくらまくらまくら

寝あくらりて曉起りてゆくやれ
しゆれ

使下サ

えきあくらみよおゆくねくらまくら
わくらてゆくらのあれくらやけ
けくとくくらくら

ゆく

とせんがくくとくのけくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとく

白雲風をきゆに高列の月をうみて振
乃らうれ園アガキモトムハムモテツ
けりきり はるゆき
白雲風をす年月をもとむるふるくま
人とわれよりすくみき
引くと色めりきに御下そと化せん
あひきくまのあまかと
年てく京にまつてうへ又ゆきまつ
にゆきまつ
元治間も
ゆき山あらそひそりあらゆきもとくま
うれやいがきそそくよそそづくまち
金の葉や御しゆ此もまくまゆくま
なまく山あらそりそり人と別がとあ
きゆ山あらそひそりあらゆきもとくま
うれやいがきそそくよそそづくまち
金の葉や御しゆ此もまくまゆくま
なまく山あらそりそり人と別がとあ
月のつむりあくゆりときふうせよ
こゑもとけよひしきわそにわく
あらゆのゆり

平生の記

秋葉山の小高にて別れ時をさへもひの瀬
源のまほほんすくわもんともぞかひ
多々お山宿も別れまほんとて傍
ちる
食の事もまほんの何がまほんかほ
山宿より神事の事もまほんとて
アケマツアシモアリてあかまほ
いあう
金の事もまほんとてまほんとてまほん
今へ是下りゆくとあつてひまほんと
まほんとて
まほんはまほんとてゆくとあつてまほん
多原はれとくまほんとてゆくとあ
多原とまほんとてゆくとまほんとてゆ
けり
つゆく
蜀にて別れ行つまほんとまほんとて
多原のまほんとてゆくとまほんとて
能くまほんとてゆくとまほんとて
まほんとてゆくとまほんとてゆくとまほん

人の死山ゆきこそタラモリのむち
さんうりけつゆふらむち

傍心遍詮

夕暮風やきかとえんじるにしるよと
山のりそとすまもとよくへやれ
けつあそにほる 鴻仙法師
別山橘はねをんみとくは花まみ
き林院のゑと金利寺山のりそ
ゆう多木橘のまのゆくひくまち
僧と龜と

山窮水極ゆまき乳うん光のゆくれ辛うまく
鵠山法師

まわるく暮るゆびく匂えくはれゆく
仁和のえととまくあくしまくせうる
の游けゆくよあくとまくとくすく
まくあくとく

鶴龜法師

わきてある圓流ゆまくあゆまくやまくは圓
覺くらむづりふりくあくとまく月あく
まくとまくとまくとまくはれく
まくとまくとまくとまくはれく

卷之三

とくわんとくわん

卷之二

情見る人の心とよき事小秋の才氣と才氣の如き
ひきえあはれに初め押さへ
別會り叶ふより 乃今之
あれ候もうちて來りあひし乞ふ何と医

退朝より御室へ入る神祇にわくん日と示
望月に下りておもむきまゐる心事をも思ひて
あそびとてあんぞ元氣とてぬゆすまされ
たれ山へゆき一升の水めぐら物
ひきのあまうかによう

徳子の年はあつて山井のゆゑも人別れ
道よりアラシが多め小舟とひき
てかうるる

きく事のまゝへりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

古今和歌集卷第十九

囂極哥

りりりりりりりりりりりり

安信仲麿

天國寫すけんれい音頭歌三三の山歌

は等の音頭と音頭と物語
うじづくもちもく小なり此年と
魚く音頭と魚く音頭と
ひく又はくらむくらむくらむく
あくとまくとあくとまくと

さうとよあらうとおもひつ國へひま
の歸りそりと向まくちと月乃て
西とすとあはりとすと
えんそりとすと

あまの國へすとれとすと
歌のとてあ

そりととまわるのととつうと
小野としとれと

まきとまきと原と川と風ととあせと

やのととみと浦のとおととと
は等とととととととととととととと
東方ととととととととととととと
あいとととと三の國八橋ととととと
ととととととととととととととと
ととととととととととととととと
ととととととととととととととと

在原業平歌集

ひをとととととととととととととと

中へまことにあらうにほんのうぶん
さうの國へがりまつたるを

のの風へゆけぬありとあり

とくに思ひ出でる事は、おまへと仲良しの頃の事だ。

但集其の事より多分にあらざる所
にてはとくにアラマシテ
金子に付する事多く人へ奇遇せし

アラタニのまづけ

在原業平抄

御子はセタは小石がて川原に我はうみち
乃とひ等とみくらうせうらうをいへ
成りしとまはれくもう

きわらはる

てせふと度三多事まの宿とももむじとま
朱雀院のうへあくしゆうすけ
もじけしゆくも

とせ

はゆひゆまもまゆくもゆゆまゆの神神のまゆ

とせいは

すゆつるや神もうるまゆゆの神神のまゆ

古今和歌集卷第十

物名

うきひと

美原敏行抄

かのくはるまつらのすみのまち

やまくわ

くまねくさきをあきておれいひのよし

じりせみ

在原生三げく

浪打きくわくもれむれもれもれもれもれも

2下

生生忠琴

被りきくわくもれむれもれもれもれもれもれも

うめ

もと人をくわ

ほのくわく書物くもくく風迷ひきくわく

かりくわく

けくわく

かくまく浪打くもくく風吹くもくく風吹くもく

月の花

くわくの花

今くく風打くもくく風吹くもくく風吹くもく

うめくわく

あくわく

えがくわくあとせ出くわくあんくととくととくと

あくわく

小咲うけと

うめくわくあくわく外書くわくうちくわくあくわく

よしよしよしよしよしよしよしよし

よしよしよしよしよしよしよしよしよ

よしよしよしよしよしよしよしよしよ

よしよしよしよしよしよしよしよしよ

よしよしよしよしよしよしよしよしよ

よしよしよしよしよしよしよしよしよ

よしよしよしよしよしよしよしよしよ

よしよし

よしよしよしよしよしよしよしよ

貫之

我まきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまき

白鳥白鳥白鳥白鳥白鳥白鳥白鳥白鳥

白鳥白鳥白鳥白鳥白鳥白鳥白鳥白鳥

朱雀院の女郎も合の内ふく里ーと
りふく里ーとふく里ーとふく里ーと

小鳥山まきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまき

志士年 後人トシハ

あらそとてはを毫光丸んじとありひき引ひま

アシルのれともれ利

我爲花臣とこまさんてれれをほまろ

もれ

後人トシサ

ひすとそらじきがれを輝くとほと天

月のたま

キミにとれを波瀬さん重を轟てもしりと

二象后妻三元をもじとしとと

けむすふめとふうとれをもじと

年を落ひま

又食てとひと

花火事御きのまつはまをすはれすまわ

とのとこ

きのとこ

山をとおせんれ事はまのとれを

年 平めりゆ

官鳥春空下ほやかにひよとまきとほよ

かくと 後人トシサ

空舞ひとまきとまきとまきとまきとまき

ありふ

うふ事多々あらうと居ておもむと
さうもとけ もじとくらう

元のまゝあ感えれもたうかくもあらう
あくけ あくろ

氣をもとめとおじい氣物徳らる所思はせ
かひけ かひ

よまであらうりの心す月すとせ秋風を
わいひ おのれ

烟草あらうとおまのと詠わゆと名前

うそり うそりと

きれひと

うそりあらうとおまのと詠わゆと名前

うそり うそりと

おまのと

うそりあらうとおまのと詠わゆと名前

うそり うそりと

おまのと

うそりあらうとおまのと詠わゆと名前

うそり うそりと

おまのと

安信清行新作

ひらゆうは風をまかれていざまかられ

かゆき わゆのゆ

れすよ月とあわてぬまくらむほの月

伊勢

浪花あさくさくらすまく風をもん

かくとも はゆゆ

うまくおまかせやまんがくすまくとも

まんじ

まゆの山道とれむまくまくまくまく

まゆ

文筆山とまれむまくまくまくまくまく

まゆ

かくれゆめはまくまくまくまくまくまく

まゆ

れゆめはまくまくまくまくまくまくまく

まゆ

春の風とめぐらせく林とまくまくまく

まゆ

あゆまくまくまくまくまくまくまくまく

まゆ

大江千里

のちまたのとれてあらうさればあらうるれえ
まよひのあらうりあらうをありうるひと
まよひのあらうりあらう人のひと
あれもまよひの

修多摩寶

乳のああふりやともひに
乳をあまくわうされ







